

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531253

研究課題名(和文) 実践的英語音声指導力の向上をはかる連携英語教員養成カリキュラムの開発、運用、評価

研究課題名(英文) The study of English language teacher training curriculum to practically improve English pronunciation and its instructional skills at teacher's college in Japan

研究代表者

大嶋 秀樹 (OSHIMA, HIDEKI)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：90342576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究は教育学部教員養成課程において実践的英語音声指導力の質的向上をはかる初・中等英語教員養成カリキュラムの開発・運用・評価を実証的に行うものである。研究では(1)英語の教員免許を取ろうとする学生のほぼすべてが中学・高校では、「聞いて、ひたすら、聞こえた英語を真似する」以外の英語の発音指導、音声指導を受けていないこと、一方で(2)英語の発音力、英語の音声指導力の向上を強く願いながら、(3)具体的にどうすれば英語の発音力、英語の音声指導力の向上がはかれるか具体的な解決策が見えない現状が明らかになった。研究ではこれらの課題の解決をはかる教員養成カリキュラムの開発・運用・評価を進めた。

研究成果の概要(英文)：One of the priorities in school education in Japan is to improve English and have its adequate proficiency in real life situations. Pronunciation is one of necessary skills and abilities to reach that target. Our questionnaire surveys revealed that students learning at teacher's college to be English teachers have had no experience to have proper, practical English pronunciation education and training at middle and high schools except just trying to make their Japanese English teachers' English or English voices of CD materials in the classroom. However, such copying ways are limited to reaching adequate levels of English pronunciation that will facilitate their communication in English. Our research introduced and developed curriculum-based English teacher training program at teacher's college, and investigated and found its effect to improve English pronunciation skills that will be practically employed into the classroom at primary, middle and high school English lessons.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：英語の音声力 英語の発音指導力 英語教員養成カリキュラム 実践的英語音声指導力 初・中等英語教員養成 英語の発音指導 英語の音声指導

1. 研究開始当初の背景

平成元年に告示された学習指導要領外国語編(英語)で、「コミュニケーション能力の育成」を柱とする外国語(英語)の実践的な能力の習得が、中学校、高等学校の英語の教育課程の改善のねらいとして盛り込まれて以来、その後の2度の学習指導要領の改訂(中学校(平成10年、平成20年))、高等学校(平成11年、平成20年))を経て、現在では、英語によるコミュニケーション能力の育成が、我が国の英語教育の国民的課題として定着しつつある。

また、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」(文部科学省、平成14年)以来、具体的に導入が検討されてきた小学校からの英語教育が、平成20年の小学校学習指導要領の改定では、外国語活動として新たに教育課程に位置づけられ、平成23年度からは小学校での英語教育(外国語活動)が本格的にスタートした。

平成元年の学習指導要領の改定以来、今日まで重視されている「コミュニケーション能力の育成」において、特に力点がおかれているのが、「音声によるコミュニケーション能力の育成」に重点をおいた英語教育の展開である。この趣旨は、小学校の外国語活動で「音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーション能力の素地の育成」が目標に取り上げられ、中学校、高等学校でも、「聞くこと、話すこと」の一層の充実と重点化としても盛り込まれていることから、指導上の配慮が特に期待される内容であることがわかる。

こうした、現在の英語教育への要請と期待を踏まえ、本研究は、「音声によるコミュニケーション能力の育成」の実現にあたって、その根幹となる英語科教員の「英語の音声指導力の向上」という課題に教員養成段階から取り組み、「実践的英語音声指導力の質的水準の向上」をはかる初・中等英語科教員養成カリキュラムを開発し、運用、評価をすすめるということに着目した。本研究では、「英語の音声指導力の向上」により、音声によるコミュニケーション能力の基礎である、児童・生徒の「発音力の向上」が可能になると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目指す方向は、教育学部教員養成課程と教育実習受入校(附属学校・地域の学校)が連携して、将来、小・中・高の英語教育を担う、英語教員を目指す学生の実践的英語音声指導力の質的水準の向上をはかる英語科教員養成カリキュラムの開発、運用、評価を実証的に行うことである。

そのなかで、本研究は、教員養成課程で初・中等英語科教員を目指す学生を対象に、

- (1) 学生自らの英語の発音力の向上
- (2) 学生の実践的英語音声指導力の向上

をはかる英語科教員養成カリキュラムの開発を進め、「将来の英語科教員が備えるべき実践的英語指導力、授業力」の基礎をつくる教育プログラムの構築を目指す。

そして、将来的に、教員養成学部教員養成課程と実習校をはじめとする地域の教育機関、地域の英語教員が連携して、将来の英語教育を担う学生の「実践的英語音声指導力の獲得と向上」をはかる実践的な学部・実習校連携型英語科教員養成プログラムの運用に向けての課題の検証と評価を行うことを研究の目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、教育学部教員養成課程において実践的英語音声指導力の質的向上をはかる初・中等英語科教員養成カリキュラムの開発・運用・評価を実証的に行うものである。

まず、平成23年度春、平成24年度春、平成25年度春・秋に開講の音声学(英語の音声理論の講義と実際の英語の発音力の向上をはかる演習を組み合わせた授業科目、英語の教員免許取得のための必修科目)の受講学生を対象に、学習者の立場と将来の英語の指導者の立場のそれぞれで、英語の発音力、英語の音声指導力についての質問紙による意識調査を実施した。

意識調査は、次の3領域について実施した。

- (1) 小学校、中学校、高等学校での英語の発音・音声指導の経験の調査(選択肢回答と記述回答を組合せた質問紙調査)(英語の発音・音声の学習経験)
- (2) 音声学の授業で何を期待し、何が必要かを尋ねる調査(選択肢回答と記述回答を組合せた質問紙調査)(英語の発音・音声の授業に望むこと)
- (3) 音声学の授業を受講しての成果についての調査(選択肢回答と記述回答を組合せた質問紙調査)(英語の発音・音声の授業で得たこと)

調査は、教員養成学部教員養成課程で初・中等英語科教員を目指す学生を対象に、(1) 学生自らの英語の発音力の向上と、(2) 学生の実践的英語音声指導力の向上をはかる英語科教員養成カリキュラムを開発し、実際にカリキュラムの運用を進めるにあたって、その基礎資料を蓄積し、その都度想定される、カリキュラム運用上の課題の整理とその解決のための実証的な資料を得るために実施した。

さらに、意識調査の結果をもとに、英語の発音力と実践的英語音声指導力の向上をはかる英語科教員養成カリキュラム作りのコア(中核)科目である、音声学の授業の改善を進めた。

そして、研究最終年度の平成 25 年度秋に開講の音声学では、

- (1) 語音課題 (目標とする母音・子音を含む単語課題)
- (2) 文章課題 (目標とする母音・子音を含む単語を含んだ文から成る、内容のまとまりを持った話し言葉の文章課題)

の 2 種類の発音課題を、受講学生 50 名に与え、受講開始時 (10 月) (事前) と受講終了時 (1 月) (事後) の 2 回、学生の発音データをデジタル録音し、音声学の授業を通じての学生の英語の発音力の向上の有無を調べ、授業の効果についての検証をすすめた。

発音課題の作成にあたっては、語の親近性、難易のレベルに配慮し、使用した語はすべて、調査の時点で、地域の学校 (中学) で最も広く使われている教科書 (New Horizon English Course 1, 2, 3) に登場する語から選んだ。

それぞれ 2 つの発音課題の録音データは、

- (1) 語音課題
目標母音・子音の発音
目標母音・子音を含んだ語音の発音
- (2) 文章課題
目標母音・子音を含んだ語から成る文章の発音

の 3 領域について、それぞれ 5 段階で、発音評価 (英語の発音としてどのレベルにあるかの評価) を実施した。(1) については、目標母音・子音の発音の正確さ、(1) については、目標母音・子音を含んだ語音の発音の容認度 (英語の発音として適切かどうか)、(2) については、目標母音・子音を含んだ語から成る文でできた文章の音声的な容認度 (英語のまとまった文章としての発音が適切な発音であるかどうか) の観点から、評価を行った。

発音評価は、3 名の評価者 (標準的なアメリカ英語を話す英語母語話者 1 名、標準的なイギリス英語を話す英語母語話者 1 名、標準的なアメリカ英語・イギリス英語の発音評価に熟達した日本人の英語音声学研究者 1 名) が実施した。

5 段階の発音評価の結果資料に加え、3 名の評価者には、それぞれの発音評価にあたっての評価コメント (自由記述の評価コメント) の提供を依頼した。

その上で、音声学を受講した学生の英語の発音力を検証する資料として、「5 段階の発音評価の結果」と「自由記述の発音評価コメント」を、学生の発音力の向上の状況を分析する評価資料とした。また、音声学を中核とする学生の実践的英語音声指導力の向上をはかる英語科教員養成カリキュラムの開発、実施に向けての授業づくりの実証的資料とし

ても、「5 段階の発音評価の結果」と「自由記述の発音評価コメント」を利用することとした。

こうした調査と合わせ、高校生を対象に、母音を中心とした音声指導を継続的に実施し、英語を母語としない日本人英語教員による音声指導の効果と、音声指導を受けた生徒の英語の発音力の向上について、実証的資料を得るための調査を地域の学校の英語教員と協同で実施した。

音声指導は、教員、生徒のそれぞれの負担を考慮して種類が比較的少なく、日本語の母音からの作り方の移行を考えて、次の 10 種類の英語の母音、

- (1) [i:]、[ɪ]、[e]
- (2) [æ]、[a]、[ɑ]
- (3) [ʌ]、[ɔ]
- (4) [u:]、[ʊ]

について実施した。

音声指導は、10 種類の母音とそれぞれの母音を語頭、語中に含む語の指導を中心に、日本語の母音との違い・音の作り方・発音の仕方の解説と練習を中心とした音声指導を、毎回の授業で継続的に行った。

音声指導にあたっては、語の親近性、難易のレベルに配慮し、使用した語はすべて、調査の時点で、地域の学校 (中学) で最も広く使われている教科書 (New Horizon English Course 1, 2, 3) に登場する語から選んだ。

一連の音声指導の評価資料を得るために、音声指導の導入前 (事前) の 4 月と導入後 (事後) の 7 月に、10 種類の課題母音を語頭に含む 8 語、語中に含む 12 語の計 20 語について、指導対象生徒 65 名 (実験群)、非指導対象生徒 14 名 (統制群)、計 79 名の英語の音声データをデジタル録音し、3 名の評価者 (標準的なイギリス英語を母語とする、英語の音声に関する専門的な知識と指導経験のある評価者、日本語を母語とする、英語の音声に関する専門的な知識と教育指導経験のある評価者、アメリカ英語を母語とする、英語の音声に関する専門的な知識、指導経験を持たない評価者) が、事前、事後の課題語中の母音発音 (目標母音の発音)、課題語の発音 (語音の発音) のそれぞれを 4 段階で評価した。あわせて、79 名の生徒を対象に、英語の発音・音声に関する意識調査 (事前・事後) を実施し、評価資料とした。

4. 研究成果

3 年間の研究期間で得た成果は、次のとおりである。

まず、平成 23 年度春、平成 24 年度春、平成 25 年度春・秋に開講の音声学での、学生の意識調査からは次のことが明らかになった。

(1) 英語の発音・音声の学習経験

回答した学生のほぼすべてが、中学・高校の英語の授業では、「聞いて、ひたすら、聞こえた英語を真似する」以外の英語の発音指導、音声指導を受けていないこと、

これまで、中学・高校で教わった英語の先生の英語の発音のレベルには、かなりの開き(目標としたいような発音の先生がいる一方で、そうでない場合もかなりあること)があること、

先生(英語母語話者英語教員、日本人英語教員)の英語の発音が上手だからといって、それだけでは、どうしたら教わっている生徒が発音が上達するかを保証することにはならなかった(発音する力(発音力)と発音を教える力(音声指導力)は同じでない)こと

が明らかになった。

(2) 英語の発音・音声の授業に望むこと

学生は、(1)の回答にも関わらず、自らの発音力の向上を強く願って、音声学の授業を受講していること、英語教員として英語を指導する上で、また、英語でコミュニケーションを行う上で、英語の発音力の必要性を強く感じること、英語の発音力、英語の音声指導力の向上を強く望みながらも、経験的には、発音の向上については、これまでどうしてよいか具体的な解決策、向上策が見えなかったことを解決したいこと

が明らかになった。

(3) 英語の発音・音声の授業で得たこと

【平成23年度春、平成24年度春、平成25年度春・秋】

英語の発音についての理論的背景、日本語の音との違い、英語の音(母音、子音、語音、強勢、プロソディ(韻律的特徴))の内容や具体的な作り方がわかった、

経験的に、中学、高校の授業で教わった発音の作り方には、無理があるような指導(そのままやっても、到底、英語の発音が上達しないような指導)もあることがわかった、

フォニックスは、発音そのものの指導でなく、英語の文字と音の関係を教える指導だと初めて気がついた(これまで、フォニックスは発音指導だと思っていた)

英語の発音指導を小・中・高で英語の教員として行うには、自分自身の発音力の向上をはからなければいけないことがわかった、

発音を学んだり、発音指導をおこなうには、基準になる発音のモデル(例えば、標準的なアメリカ英語、標準的なイギリス英語など)が必要で、通じれば何でもいいというものではないことがわかった、

どうやったら、自分の口を使って英語の発音を作ることができるかが、具体的にわかった一方で、自分で練習することの難しさ、人に発音を教えることの難しさがわかった、

自分の発音力のレベルが一定以上で、きちんと英語の発音の作り方を具体的に知っていても、指導技術があれば、日本人英語教員でも、英語の発音・音声指導が可能なが理解できた、

(英語母語話者の歌と経験的に英語の歌をおぼえた日本人の英語の歌を比べて)(また、自分の経験も振り返って)ただひたすら、聞いて真似をするだけでは、英語の発音は上達しないと思うようになった、

発音がうまくできることによって、英語の音声の聞き取りがうまくできるようになった

ということが明らかになった。

そして、平成25年度秋の音声学の授業で実施した発音課題の評価からは、

(1) 語音課題

目標母音・子音(個々の音の正確さ)
個々の母音・子音、同じ母音・子音でも現れる位置が語頭か、語中か、語末かによって、評価結果に違いが見られたが、全体としては、事前と事後の評価結果の比較では、事後の方が、評価が向上する結果が得られたこと、

目標母音・子音を含んだ語音の発音(語音の発音の英語としての適切さ)
課題語による評価傾向の違いは認められたが、事前と事後の評価結果の比較では、事後の方が、評価が向上する結果が得られたこと、

(2) 文章課題

目標母音・子音を含んだ語から成る文章の発音(まとまりのある文章の発音の英語としての適切さ)

まとまりのある文章の発音では、個々の母音・子音の発音、語音の発音に加え、抑揚や文の強勢といった、韻律的な要素が、発音評価の観点に加わるが、音声学の授業での音声指導が、個々の母音・子音の発音、語音の発音に多くの時間が割かれる傾向があったが、まとまりのある文章の発音についても、事前と事後の評価結果の比較では、事後の方が、評価が向上する結果が得られたこと

が統計的な処理を経て明らかになった。

音声学の授業の回数は、90分間×15回で、量的には決して十分とは言えないが、自宅学習でも利用できる、目標母音・子音の作り方を示した資料を毎回、練習用の課題と合わせて配布し、アメリカ英語、イギリス英語のそれぞれで、発音モデルとなるデジタル音源（携帯用の音楽プレーヤーで利用できるもの）の利用を呼び掛け、合わせて、選択授業のアメリカ英語の発音演習の授業も並習するよう呼び掛け、選択授業を並習した学生が多かったことも、50名という、比較的多い学生が音声学を受講したにもかかわらず、事前と事後で、事後の方が成果が上がった結果につながったのかもしれない。

また、授業後に、個別に、発音の仕方について質問する学生も多く、50名の受講者の期間を通じての欠席率が低く、発音の練習を、課題の英語の歌の練習と合わせ、熱心に、授業、授業外で取り組む学生が多かったことも、こうした成果につながったと考えられる。

評価者の評価行動については、3名の評価者のうち、2名の英語母語話者が、音声学的な背景を持たない評価者であるためか、やや母語のアメリカ英語、イギリス英語の違いを反映した評価行動の違いが評価結果に影響したことが、それぞれの評価者から提供を受けた評価コメントからうかがえた。

結果の詳細については、現時点では、分析中のものもあり、機会を改めてその成果を発表することにしたい。

最後に、日本人が、母語でない英語の音声・発音指導をすることについての可能性と課題についての検討のための基礎資料を得るために実施した調査の結果からは、次のことが明らかになった。

3名の評価者による4段階の、(1)10種類の課題母音の発音の評価、(2)10種類の課題母音を含む語音課題の発音の評価からは、英語を母語としない、長期の英語圏での滞在経験のない、日本人英語教員による英語の母音を中心とした継続的な音声指導が、10種類の母音の発音と母音を含む語の発音のそれぞれの発音の向上に効果（実験群・統制群の比較）があることが明らかになった。

実験群と統制群との比較では、「聞いて、真似する」インプットのみでの発音指導を行った統制群に比べて、実験群においては、発音指導後の10種の個々の母音の発音で、統計的に有意な改善が認められた。また、個々の母音の発音の向上だけでなく、母音を含む語音の向上にも効果があることが明らかになった。

また、生徒への意識調査からは、英語の音声指導を受けることで、英語の音声・発音への意識や自信が高まり（実験群・統制群の比較）、指導上の効果が認められる結果が得られた。

意識の変化については、音声・発音指導後、実験群で、母音の発音、語音の発音に対す

る自信が向上した。英語の発音・音声指導を繰り返し行うことで、学習者の英語の発音の意識や自信の向上に効果があることが明らかになった。

さらに、3人の評価者の音声評価の評価行動の分析からは、英語を母語とする英語の音声に関する専門的な知識と指導経験を持つ評価者と、日本語を母語とする英語の音声に関する専門的な知識と教育指導経験のある評価者の評価行動に統計的に高い正の相関が認められ、英語を母語としない、英語圏での長期の滞在経験のない、日本人英語教員であっても、音声指導への知見と経験の研さんを積むことで、生徒の発音力の向上が期待できる英語の音声・発音指導、評価に一貫性があり、妥当性のある英語の音声・発音評価を行うことができる可能性を持つことが明らかになった。

3名の評価者の評価行動については、母音、語音で評価者間に違いが認められ、英語を母語とする評価者の発音評価であっても、評価基準がぶれない、一貫性のある妥当な発音評価ができるとは限らない結果となった。さらに、英語を母語としない日本人英語教師が、音声・発音指導を行い、向上したかどうかを、発音評価の知見と経験のあるネイティブと同等に、正當に評価ができることを実証的に示す結果が得られた。

本研究では、

- (1) 英語の教員免許を取ろうとする学生のほぼすべてが中学・高校では、「聞いて、ひたすら、聞こえた英語を真似する」以外の英語の発音指導、音声指導を受けていないこと、一方で、
- (2) 英語の発音力、英語の音声指導力の向上を強く願いながら、
- (3) 具体的にどうすれば英語の発音力、英語の音声指導力の向上がはかれるか具体的な解決策が見えない現状

が明らかになった。

研究ではこれらの課題の解決をはかる、英語発音力の向上と、実践的な英語音声指導力の向上を目指す、英語教員養成カリキュラムの開発・運用・評価に向けての研究を実証的に進めた。

3年間の研究で得た知見は、その時々々の学生への音声指導、学生の英語の発音力の向上に、授業や学生指導の機会を通じて生かしてきたが、こうした大学内での研究成果の還元だけでなく、研究成果を地域の教育や教育実践に還元することも行ってきた。平成24年度からは、地域の中学生、高校生に向けた英語の発音講座「英語の発音を学ぼう」を毎年開催し、地域の小・中・高の英語教育研究会、高校生対象の地域の英語ディベート研修会でもその成果の発信を行っている。

本研究で得られた知見を生かして、今後は、

教育学部教員養成課程と地域の教育機関、地域の英語教員が連携して、将来、小・中・高の英語教育を担う、英語教員を目指す学生の実践的英語音声指導力の質的水準の向上をはかる英語科教員養成カリキュラムの開発、運用、評価、地域の小学校・中学・高等学校の英語の教育実践の場の実態に即した英語の音声・発音指導プログラムの開発、運用、評価についての実証的な研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

多良静也、大嶋秀樹、「日本語訛り英語発音が中国人の英語聴解力に及ぼす影響」、『紀要』、四国英語教育学会、査読有、第31号、2011、pp.37-46

大嶋秀樹、「英語教育と情報教材」、『情報学教育研究』、情報学教育研究会、査読有、2012年号、2012、pp.25-32

大嶋秀樹、疋田恭子、「中学・高等学校一貫教育における、英語音声指導プログラムの開発、運用、評価」、『地域教育連携年報』、滋賀大学教育学部地域教育支援室、査読無、第7号、2012、pp.39-40

梶本はる香、田附弘和、大嶋秀樹、「小学校外国語活動(英語)と中学校外国語(英語)の滑らかな接続を図る英語科教育プログラムの開発」、『地域教育連携年報』、滋賀大学教育学部地域教育支援室、査読無、第8号、2013、pp.42-43

梶本はる香、大嶋秀樹、「生徒の自律的な学びを支援する英語教育プログラムの開発、評価」、『地域教育連携年報』、滋賀大学教育学部地域教育支援室、査読無、第9号、2014、pp.40-41

〔学会発表〕(計3件)

多良静也、大嶋秀樹、柳澤佳代子、「訛り英語を再考する」、『全国英語教育学会、発表査読有、第36回全国研究大会(於：山形大学)』発表予稿集、pp. 330-331

大嶋秀樹、亀井郁、多良静也、「英語の音声・発音指導：英語教員を目指す学生の意識調査から」、『全国英語教育学会、発表査読有、第36回全国研究大会(於：北星学園大学)』発表予稿集、pp. 398-399

Kamei Iku, Oshima Hideki, Yuhaku Atsushi & Hamaoka Takafumi, "Cortical Mechanisms of L1 and L2 Sentence Processing in Japanese and English Visual Sentence Comprehension", The 19th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, OHBM (the Organization for Human Brain Mapping)、発表査読有、2013、the Washington State Convention Center、Seattle, WA, USA

〔図書〕(計1件)

Oshima Hideki, ひつじ書房、*fMRI Study of Japanese Phrasal Segmentation: Neuropsychological Approach to Sentence Comprehension*、*Hituzi Linguistics in English No. 18*、2013、240 pages

6. 研究組織

(1)研究代表者

大嶋 秀樹 (OSHIMA, Hideki)

滋賀大学教育学部・教授

研究者番号：90342578

(2)研究分担者

多良 静也 (TARA, Sizuya)

高知大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：00294819